2009年（平成21年）
第19号
（7月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

京都教会５０年の歩み（５回目）壮年・青年層による社会・平和活動への取り組み

滝口教会長が就任した昭和４４年当初、中京・左京・右京・亀岡の４つの支部編成で出発したが、会員数の増加と支部活動の活発化により、支部数は漸次増設され、昭和６２年に至って上京・中京・下京・左京・右京・伏見・乙訓・宇治・京南・山科・亀岡と１１支部に拡大された。

支部の拡大とともに、壮年層の活動も活発化していった。経営や商売に対して信仰による救われを求める個人経営者を対象に、昭和４８年、壮年有志による「中小企業懇話会」が開催された。その後、昭和５６年に「職業研修委員会」に引き継がれていった。

さらに、昭和５０年代に入ると、世の中は物質的な豊かさを追求していくのだが、一方では人々の悩みや苦しみは複雑化し、潜在化していった。親子の断絶、家庭内暴力、熟年離婚、サラ金問題など、かつての「貧・病・争」が複雑化する時代の流れに対応すべく、豊富な社会的経験と専門知識を有する壮年会員たちの協力と支援により、現実社会での実際的な問題解決を図りつつ、魂の救いを実現していった。

また、昭和５９年、教会渉外部が新設され、対外的なふれあいをより推進していく中で、本会の社会的認知を促すように取り組んできた。明るい社会づくり運動と連携して「普門講演会」を催したり、政治浄化への取り組みとして、政治家との接点を持つようになったのも、この頃からだ。

一方、青年部は地道な青少年育成活動を積み重ね、教会や支部、一般社会に有為な人材を輩出するようになっていた。活動の幅も広がり、平和活動の中核的な役割を果たすようになっていた。

「国際児童年」の昭和５４年の青年の日には「ユニセフ街頭募金」を市内全域で実施するようになり、「一食をささげる運動」が会員の中に広がっていった。

昭和５７年には「核兵器廃絶・世界軍縮キャンペーン」の署名活動や平和行進、平和集会などを展開。平和への世論喚起に貢献した。

さらに昭和５９年に、飢餓が深刻化するアフリカへの救援活動として「アフリカへ毛布をおくる運動」がスタートした。

アフリカへ毛布をおくる運動（現地リポート）

◆一食支援スタッフによるエチオピア現地リポート

本会の一食平和基金運営委員会の事務局スタッフがこのほど、エチオピア北部のティグレ州を訪れ、同基金が現地ＮＧＯのＲＥＳＴ（ティグレ救援協会）と合同で進めている毛布の配布状況を視察。現地スタッフ、毛布を受け取った方の「声」を報告します。

■毛布を受け取ったブルナッシュさん（６０）

病気をしてから働くことができなくなり、ＲＥＳＴの食糧配給支援も受けています。毛布を頂く前は薄い布をかけて寝ていましたが、とても寒かった。今は毛布があるので安心して眠れます。

■毛布を配布したマコーネン・アブラハさん（４２）

皆さんの真心が伝わり、毛布を受け取った住民たちはとても喜んでいます。ある女性は、『今でも４人の子供は、毛布に一緒にくるまって寝ている』と教えてくれました。その女性が毛布を受け取ったのは６年前です。一枚の毛布を家族みんなが大切に使っています。

時事刻々

国際原子力機関（ＩＡＥＡ）の次期事務局長を選出する特別理事会が二日開かれた。日本の天野之弥（ゆきや）ウィーン国際機関代表部大使が日本人・アジア出身者として初めて選ばれた。

米国のオバマ大統領は核廃絶を究極の目標と唱え、核廃絶への国際的な機運が盛り上がりそうになっている。この時期に唯一の被爆国から選ばれたＩＡＥＡ事務局長に期待したい。

近隣国の脅威に核武装の必要性を口にする人がいるようだが、それで本当に国が守れるのか。

中国の韓非子に出てくる話で「どんな盾も突き抜く矛」と「どんな矛も防ぐ盾」を売っていた男が、客に「その矛でその盾を突いたらどうなる」と問われ答えられなかったということから矛盾という言葉が生まれた。

核兵器の矛盾を取り払うために、日本人が率先して働きかけ、天野氏を応援していくようにしなければならない。

２００９年京都教会は発足５０周年を迎えます。私たちは『多くの方との“絆”をより深めよう』をテーマに修行精進します。

諸宗教対話　～開祖の願いをこの京都の地に～

宗教協力　亀岡宗教懇話会より

平成２１年６月２０日(土)亀岡宗教懇話会主催のかめおかこころ塾が亀岡ガレリアで開催された。今回は、中村憲一郎京都教会長が「幸せになる秘訣」と題して講演を行った。

「死ぬときに後悔すること２５」(終末医療の医師の本より：大津秀一著、致知出版社）から「健康を大切にしなかったこと」や「他人を優しくしなかったこと」などを紹介。また「みんな幸せに生きたいと願っている」として正しい宗教のあり方を説明した。

事柄・現象に対して神仏に拝んで解決してもらうのではなく、自分自身が教えに照らして心と行いを変えていくことで事柄・現象にふれ合っていくことの大切さを述べた。

最後に具体的な生き方として、①３つの実践（朝のあいさつ、「ハイ」という返事、はき物をそろえる）②そ・わ・かの実践（掃除、笑い(笑顔)、感謝）③う・た・しの実践（嬉しい、楽しい、幸せ、ありがとうの言葉）を紹介し、これらの実践を和やかな雰囲気の中、参加者みんなが誓い合った。

私たちの政治への取り組みについて（総選挙を前にして）

マザーテレサは「愛の反対語は無関心だ」と述べた。まさに、名言だと思う。それにしても、日本の国民は自分に直接関係のないと思うことには、関わりを持とうとしないことが多い。例えば、政治に無関心な層が多く、選挙の投票率が低いことが問題になっている。

私たちは、信仰者として、政治には積極的に関わるべきだと考えている。そのため、会員はもちろんのこと、周りの人たちに、政治に関心をもってもらい、選挙への参加を呼びかけることを、最も重要と考える。

そして、信仰者としての正しい政治への取り組みについて、機会あるたびに学習している。庭野開祖は、宗教と政治について、次のように述べている。

「私は、政治というものにたいして、ひと一倍の関心をもっています。といえば、宗教家として余計なことではないかと考える人があるかもしれませんが、それはとんでもない思いちがいです。人間の心を正しく、明るく、豊かにする（宗教）と、人間の現実生活を正しく、明るく、豊かにする（政治）とは、車の両輪であって、どちらを欠いても社会はアンバランスな状態におちいるのです。」

この考え方を基本とし、よりよい政治が行われることを願って、政治に関わっていくわけだが、本来、今の政治は国民主権といわれるように、政治家が行うのでなく、国民が行うものである。

私たちが学ぶ仏教の真理に照らしあわせば、政治が良くないのは、その因を作っている主権者である私たちに元があることになる。

自分や自分の地域や組織にメリットを求める心があるから、政治もその求めに応じて、自分ごとを優先するものになる。私たちが、真に「世のため、人のために」尽くす心を持ち、その心で政治家と接することが、よりよき政治の実現につながることになる。

今回予定される、総選挙においても、私たちが今一度、その考え方を再確認し、積極的に取り組んでいくようにする。そして、信仰心をもった政治家が、ともすれば物質や権力にとらわれがちな政治の世界に、人間らしいスガスガしい息吹を吹き込み、真に国民のためになる政治を実現してもらいたい。

今月は「私のほのぼの日記」はお休みさせて頂きます。

他教団活動紹介（中外日報６月２７日より）

●臓器移植法改正で大本が要望書

大本（出口紅教主、本部＝京都府綾部市・亀岡市）は２４日、国会で審議が進む臓器移植法改正案について、子どもの脳死判定基準等を検討する第二次「脳死臨時調査会」の立ち上げなどを求めた「臓器移植法改定に関する要望」書を麻生首相、舛添厚労相、江田五月参議院議長、辻泰弘参議院厚生労働委員会委員長、全参議院議員（２４２人）に送付した。

京都教会　あの日あの時

昭和３７年４月

待ちに待った新道場(旧京都教会)が建設され開祖さまをお迎えして教会落成式式典が行われました。広くなったはずの道場にも会員さんが入りきれず屋外テントで式典に参加しました。

５０年前（１９５９年）の出来事：１９２１年の度量衡法改正を受け、６月にメートル法完全実施で尺貫法廃止になりました。

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

《真理によって救われる》

菩薩行(布教や奉仕活動をすること)が大好きで、いつも人さまのために走りまわっている女性の方がいました。家には何年も不登校を続けている娘さんがいましたが、「私は娘のために菩薩行をしているんだ。人さまのためにいいことをしていれば大丈夫」と、朝早くから夜遅くまで飛び回っていました。

ご指導を頂いて、何かひとつ実践すると娘さんは学校に行き始めますが、またすぐ行かなくなる、その繰り返しでした。自分はいいことをしているんだから、原因はほかにあるはずだと思い、夫を責めたこともありました。けれども、どんなに努力をしても娘の不登校は直りません。そんな娘を憎く思うことさえありました。

ある時、教会長さんが、その女性に聞きました。「あなたの好きなことは何？」「布教です」「じゃあ、嫌いなことは？」「家の掃除です。あまりやっていません」すると教会長さんは、こう言いました。**「好きなことだけやっているのなら、お嬢さんと同じですね」**自分勝手に不登校している娘が、人さまのために菩薩行をしている自分と同じだと言うのです。

家に帰って、娘に「お母さんは母親として何点だと思う？」と聞いてみました。すると即座に「０点」という答えです。さすがにがっかりして、それからは少しでも点数を上げよう、いい母親になろうと、早く家に帰り、苦手な家事や娘のために、時間と心を使いました。「３点」「１７点」「３４点」と、娘さんは毎日少しづつ点数を上げてくれました。そんなある日、娘に聞きました。「あなたは何点なの？」。すると娘は「お母さんと同じだよ。お母さんが０点の日は私も０点、１７点の日は私も１７点」と答えたのです。

だめな子だと思っていた娘が、自分が尊敬している教会長さんと同じように「親子が一緒だ」と思える、本当は素晴らしい感性の持ち主だったと気がつきました。〈この子はすごい子だなあ〉。その時、初めて心からそう思いました。それからは、どこにいる時も、ふと、〈娘はどうしているかしら〉と心が動くようになりました。今まで、そんなこと思いもしない冷たい母親だったのに、自分の心の中にもこんな温かいものがあったのかと、嬉しくなりました。

そんな時、遊びに来ていた従姉(いとこ)が娘さんに言いました。「大学に入るにはね、やっぱり高校を出た方がいいみたいよ」その言葉を何気ない様子で聞いていた娘さんでしたが、翌日から急に学校に通い始め、それからは一日も休むことがなかったそうです。

なぜ、こんな事が起こるのでしょう。出会いの中で、人の仏性に気づき、自分の仏性にも気づいていくこと、それが本仏の願いであり、私たちが人生の中で求められていることです。ですから、**仏性に気づけば卒業です。あとは仏さまが動いて下さるのです。**

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《つらい旅(中)》

昭和四十六年二月、ＷＣＲＰのニューヨークでの役員会に出席するため、羽田空港から出発しようとしていた庭野開祖に突然の訃報が入った。三女・泉田佳子さんの夫の泉田和男氏が急逝したのである。

戦時中、直子夫人と六人の子供が故郷の菅沼に疎開して行った時、佳子さんは小学三年生だった。それから十年間も続いた疎開生活に疑問を抱いたのは当然だったろう。その疑問や悩みを、佳子さんは庭野開祖にぶつけることもあったという。

子供を田舎に疎開させた当時の会の修行は、それは厳しいものだった。神様のおっしゃる言葉を守ることにかけては、いささかの妥協も許されない。家族の疎開も、そしてその疎開先からの帰京がなかなか許されなかったのも、脇祖・長沼妙佼を通しての神様のお言葉に従ったものだった。

六人の子供の上の三人は女の子で、そのあとに男の子が三人続いた。当時、長女や次女はいくらかものがわかる年になっていたが、あとの子供たち、とりわけ下の三人の男の子が分かってくれるかどうか、庭野開祖はそれがいちばん心配であった。母親が六人の子供をかかえて疎開先の田舎で真っ黒になって畑仕事をしている姿を見ていれば、男の子は母親の方についてしまうのは当然だ。「何という父だろう」と、反感をつのらせても仕方がないだろう。

すでに亡くなられた次女の羌子(きょうこ)さんが、庭野開祖に向かってある時こう言った。「お父さん、今のようなやり方をしていたら男の子は誰もお父さんについていきませんよ」これほど胸に突き刺さる言葉はなかった。その、次女の遺言と言っていい言葉で、庭野開祖は子供への態度を変えずにはいられなかった。

それまで、自分の使命を果たすことが先になって、子供たちの気持ちを思いやる余裕がなくなっていた。「これではいけない。それぞれの子供の性格に合わせていくことが大事だったのだ。世の中には、様々な性格の人間がいる。**自分の考えを押し通すのでなく、よほど相手に譲歩していかなければ事はなるものではないのだと、子供たちに教えられたのであった。寛容の心を子供たちから学んだと言ってもいい**」と、庭野開祖はのちに述懐している。　(つづく)

ここが聞きたい！「藤末健三参議院議員に聞く」(2)

【最近、地方分権についての議論が活発ですが、国からのトップダウン方式のやり方にはやはり問題があるのでしょうか】

国が道路や学校を作る予算を配るのではなく、地方の予算は地方で使い方を決められるようにする事が重要です。そのためにも国の「ひもつき補助金（使い道が決められている補助金)」を全て廃止し、地方の方々が自分達で医療や教育や介護など必要とする所に予算を使えるようにすべきです。また、地域のコミュニティ活動を行う NPO（非営利組織）などの活動を税制などで支援できるように変えていきたいと考えます。

【年金問題についてですが、社会保険庁のあり方も含めて、抜本的な対策が必要ではないでしょうか】

年金とは自分の老後のため貯金ではなく、戦後焼け野原だった我が国をこれだけ豊かな国にしてくださった先輩方への御礼であり（法律でそうなっています)、その考えを徹底すべきです。したがって、先輩方が安心して生活していただけるように、①最低限の年金（月額 8 万円程度）を保証し、②年金保険料の支払いを完全に義務化し、税金と一緒に集めるようにします。これにより、現在は半分程度しかない国民年金の徴収率を上げることができます。具体的には、最低限の年金額の財源は現在の保険料方式ではなく税金方式とし、多くの問題があった社会保険庁（職員 1 万 7 千人）は廃止し、国税庁（5 万 6 千人）と統合させます。

【介護の問題についてですが、後期高齢者医療制度などを見ても、高齢者のための対策とは到底思えない内容だと思いますが】

現在、特別養護老人ホームを待つ方は 39 万人、介護を受けることができない介護難民は 85 万人と言われ、また、介護士は 5 年後に 30 万人不足するといわれています。この状況に対応するには介護士の給与を上げ（1 割以上)、また介護施設の整備を行う必要があります。このためにも年間 210 兆円にもなる政府の予算の無駄使いをなくし、介護に予算（約 1 兆円）を回す必要があります。

【オバマ大統領が就任して、核兵器廃絶に向けての世論が高まってきています。つい先日も、国際原子力機関（IAEA）のトップに日本人が選ばれるなど、平和憲法を持つ日本が果たすべき役割は非常に大きいものがあると思いますが、軍縮に向けて具体的な取り組みはされていますか】

2010 年５月にニューヨークの国連本部において、NPT（核不拡散条約）運用検討会議が開催されます。NPT とは、1970 年に発効された国際条約であり、核兵器を所有している米・露・中・英・仏の国以外を非核兵器国として核武装を行わないこと、核兵器国は核軍縮を進めることを定めています。また、この運用状況を５年に１度検討を行うことも決められています。

2005 年に行われた前回の運用検討会議では、核兵器国と非核兵器国とで議論が紛糾し、議題を決めることにほとんどの期間を費やしてしまったため、実質的な議論ができず、失敗に終わってしまいました。2010 年の会議でも同様の事態が起きてしまえば、NPT 体制は完全に崩壊してしまいます。

今年 4 月にアメリカのオバマ大統領が演説の中で、**「核を使用した唯一の国としての道義的責任」について触れ、「核のない世界を目指す」**と明確に述べられたことを受け、世界の核廃絶への機運が高まってきました。そして、今年 5 月に国連本部で行われた運用検討会議の準備委員会では、非常に前向きな雰囲気の中で、来年に向けた議題の設定や実質的な議論が行われました。

私も国連本部へ伺い、関連会議に参加し、世界各国の国会議員や有識者と議論をしましたが、核廃絶を実現するための絶好の機会であると強く感じました。

国連のロゴマークの前で

わが国は「唯一の被爆国」であります。その日本が核廃絶を目指すために世界の先頭に立って行動することが求められています。より多くの方にこの NPT 運用検討会議の重要性をご理解いただき、2010 年の会議では核廃絶を進めるための具体的な成果をあげられるよう、活動していきたいと思います。

渉外部からのメッセージ

７月２２日に日食が観測されます。日食の欠ける深さを「食分」という数値で表し、食分０．１とは太陽の直径の１０％まで太陽面上に月が入り込み、太陽が欠けることを意味しています。つまり数値が１．０に近づくほど皆既日食になる訳ですね。京都は１１時５分５３秒に最大食分０．８０９になるということです。何かと忙しくなりそうな今年の７月。ダイナミックな宇宙をゆっくりと感じるのもいかがでしょうか。詳しくは国立天文台ホームページ http://www.nao.ac.jp/phenolmena/20090722/を参考にして下さい。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266